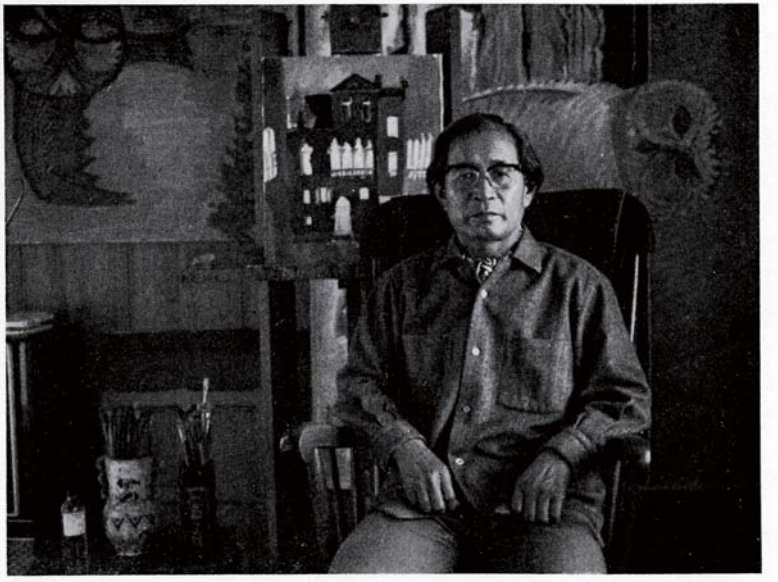
●アトリエ訪問

谷口一芳 会員

訪問／原　義行



6月17日は小雨の寒い日だった。昨年からの約束でアトリエを訪問する。（といってもわざわざ自家用車で迎えに来て貰って）

西野ターミナルから1キロ程，手稲山麓の閑静な新築間もない谷口さんの家は如何にも瀟洒で安らぎのある庶民的なやさしさの感ぜられる家である。放し飼いのセキセイインコを肩に止まらした美しい奥さんに迎えられ久濶を述べる。4年程倶知安に勤め道庁勤務として帰札されるまでしばらく会うこともなかったので話は自然と思い出話になる。

2人のお子さんもそれぞれ大学を卒え就職された谷口さんはやれやれというところで，この春欧州12カ国を精力的にまわる研修旅行をされた。私の個展会場に「おとといかったばかりで」と馳けつけてくれたのも嬉しかった。

2階の南向きの17，8畳程のアトリエにはスケッチの山と，それをもとにした描きかけの作品が幾点かあり，谷口さんの明日への意欲が伺われた。話はヨーロッパの古跡，美術館，人情と尽きない。「長い間鳥を描いて職業柄鳥はよく知っているつもりだ，しかしそれにとらわれないで鳥の群れの中に人間の姿や，鳥の表情に人生の詩をうたいたい」という谷口さんには大きな夢があり「絵は楽しんで描くもの，夢を描くもの」ともいわれる。また「鳥を大切にすることは環境を美しく守ることだ」ともいわれるあたり道庁林政課の長い生活が裏打ちされている。

ともあれあと1カ月で停年を待たず退職するという谷口さんの眼は輝き，胸は夢で一杯にふくらんでいられる感じ，頑張れ谷さんと拍手を送ります。

旅の話，絵の話と尽きないが酒を呑み呑みへボ碁を囲む，絵ではかなわないが碁は私の方が少し上のよう，パチリパチリと楽しい一夕だった，また車で送って貰って深更帰宅，あまりいい訪問記事にならなかったが楽しかった。

●アトリヱ訪問

神田一明 会員

訪問／遠山隆義

神田さんのアトリエには，何度かお邪魔させて戴いたこともありますが，今日は誠に恐縮ながらアトリエ訪問というかたちでお伺い致しました。

国道40号線ぞいの市内からは，ほぼ離れた所に，温泉や娯楽場などでにぎわう，旭川では名所の高砂台があります。そこから200メートル程入りますと小高い緑の丘が見え，多様な雑草がおい茂り，山菜の味も格別といわれる。恵まれた此の大自然をいっぱいに受けて神田さんのお宅があります。

アトリエには，小鳥やリスが舞い込むことも珍しくないという。

壁には花や風景，とりどりの小品が飾られ，描きかけの白いキャンバスもありました。又お嬢さんが描いたクレパス，水彩画も，実にほほ笑ましい感じでした。奥様の彫塑も，ひときわ目立って置かれ見るからに家族ぐるみ，共同のアトリエともいわれる様です。

なんとなく快よい雰囲気の中で，レモンの薫りも一層おいしく，紅茶を戴きながら，奥様もそばにあれこれ雑談をかわしました。

神田さんとは，全道展25回目頃からのお付き合いで，それから後はすべての意味でも，先輩であり，魅力ある神田さんの作品には，いつも感銘している次第です。

アトリエから受けるイメージとは，少しばかり以つかないものもあり，それとなく話を聞いてみますと，静物画などの場合，題材は，あきビン，カンその他，色々な物を細かく観察し，それを記憶して組み立てる。

港の風景も多いが，海が好きで一年に二，三度は泊り掛けでクシロの海を描きに行くとの事。わりに，たんたんとした口調で話す。神田さんのそのお人柄に，若い熱気を感じさせられました。

仕事の合間には一息レコードに聞き惚れ，疲れをしのぎ，又自分のモチーフの為に，雑草を集めてはドライフラクーを作るのも，楽しみの一つであると言われる。

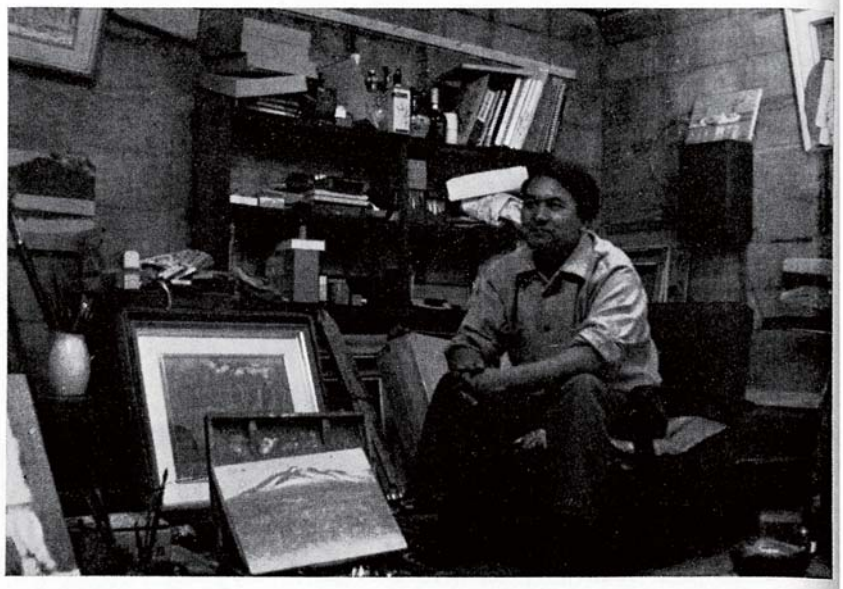
現在は教育大学助教授の職務を持ち，美術講師をするかたわら，独自の絵画に専念する神田さんの意気込みは，そのまま作品の意欲と成っている様だ。

全道展の出品作は，大学の研究室で取り組み中，大作はほとんどここで制作するそうです。

神田さんの前途を期待しつつ，のどかな午後の五月晴れに私はハンドルを握った。

●アトリエ訪問

三　箇　三　郎　会員



訪問／木　村　訓　丈

三箇さんとは，この1月，函館の棒二デパートで開催された田辺三重松水彩素描展の会場でお逢いした切りであった。事務局から三箇さんのアトリエを訪問するように連絡を受けたのは随分早くであったが，私自身があちこちと旅行を余儀なくされていたので，ついつい一日のばしになっていて，アトリエに伺ったのは，もう原稿の〆切りも間近い5月中旬の夕刻であった。

柳町。静かな住宅街である。近くには五稜郭公園があり，少し足をのばすと堀端の桜の木も見ることができる。

三箇さんのアトリエは，三箇さんの作品でもある。20畳の広さを持つ。このブロックのひとつひとつを，勤めから帰ってくると直ぐ仕事にかかり，独りで，真暗になっても，こつこつと積み上げていった。セメントのアルカリは皮膚を痛める。指先の脂肪が溶けて，両手はボロボロになった。一夜に一段のノルマを自らに課して，それを果すまで夕食をとらなかったそうだ。背丈より高くなると，重いブロックとセメントを持って，ひとりで足場を昇り降りした。しかし完成の歓びはひときわ大きいものだったと思う。こうして子細にみると，なかなかの出来映えである。天井は船底にしてあって，たっぷりとした空間をつくっている。梁をベニヤで被ったり，ブロックはむき出しのまま壁面になっていたり，明りとりも兼ねたガラス戸が酒落気もなく玄関になっていたり，とにかく手造りの肌触りが持つ或る種の親密感が濃厚に漂う。コンクリートのたたきには石油ストーヴが備付けられ，音を立てて気持良く燃えている。その傍のイーゼルには，全道展出品予定の百号の絵が掛っている。「水面」，湖に映る木の幹の揺らめき。黄色と白の下描きの段階。「これが間に合わなかったら，「ドックの灯」を出品する。」そのとき奥様が，酒と肴と微笑で現われる。「さ，まず一杯。」なみなみと注がれたビールをいただきながら，もう一度，遠慮なくあたりを見まわす。プレーヤーの上の壁に田辺三重松さんの色紙がある。函館大森浜の風景。そのとなりは氏の近作。そのとなりは空の額縁で，うちわが2本差し込んである。その下はスピーカーボックス，その下は紙袋やカメラ，キャンバスとフード，三脚にボール箱。お世辞にも整頓されているとはいえない乱雑さだが，どうもこの雑然たる感じは，三箇式整理学の気配。必要なものは，直ちに何かの陰から取り出されて，眼の前に現われる仕掛だ。話は近作のことや田辺先生のこと，公募展の功罪から作家のエピソード，ビールびんがどんどん空になって，特殊教育の意義に及ぶ。更に空びんが増える。「ところで，今何時でしょう。」「おれは昭和20年から時計というものを持たないことにしている。何時だろう。」緻密で大胆な行動力と時計も持たないおおらかさとの同存。二人で裏庭へ出て立ち小便。夜風がさらりと星空を撫でた。

五月の或る日，谷内氏の処を訪れると爽やかな風と陽を背に浴びながら彼は粘土をこねていた。とみると前庭に俗に言う「のぼり窯」の原型といわれる長さ一間半ほどのミニ，ヘビ窯が九分通り作られていた。それは柳の木で編んだ骨格に藻岩山麓より車で何回も運んできた土を張り付けて作ったもので，一朝一夕には出来るものではないらしい。それらを見ていると「物の怪」につかれたとはよく言ったもので谷内氏のように自分のやりたいと思ったことを，ただ一途にやり抜くということは私にとっては，実に羨望の極みである。

庭のそこここに大きな土がめや樽などが置いてあり，その中に幌見峠付近の土地を整地した所よりでた鉄分の少ない白っぽい土をとってきて，それを土がめや樽の中で攪乱したり，沈澱させたりする工程を繰り返しながら，何日もかかって粘土を作り，それを「ろくろ」にかけるまでは半年位もかかるという大変な努力が必要だそうであるが，釉薬にしても，木の葉，モミ殻，はては貝殻，海草にいたるまで利用し，これらを燃やして灰にし水で溶いて濾過したものを使い，彼独特の素朴な神秘性の発見につとめていると言う。

話がはずんで，土や釉薬の科学的な成分から分析におよび，試作につぐ試作により，彼の願っている藻岩焼の素朴な美しさに到達するまでの過程について聞かせてもらったが，彼らしく納得がいくまで，ひたすら追求してやまないという姿には脱帽のほかはない。

また家屋の隣にある手作りの工房の中の，棚という棚には，無数の作品がところ狭しと並べてあり，それを見るとどれも渋く美しく輝いており思わず感嘆の声をあげてしまった。

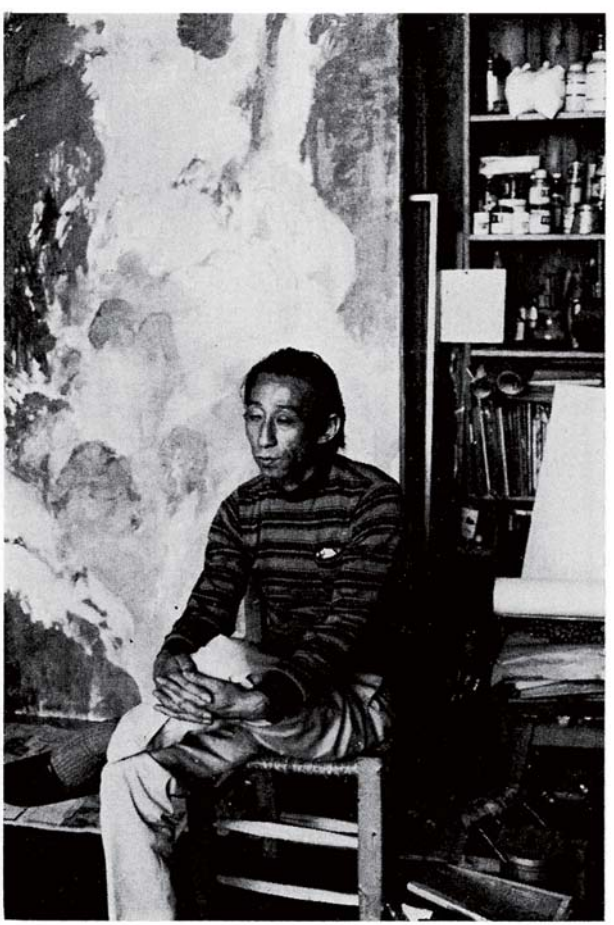
種々の焼物にたいする造詣や含蓄も深く，たまたま見せてもらった壺のなかに，異質な大きな水差があったので聞くと，「スペイン旅行した時，途中の市場でみたこの水差に感激し，欲しくて欲しくてたまらず，旅装を解くなりすぐ買い求めたが，そのため水差を入れる大きなカバンまで買わなければならない羽目になった。」と笑う。そのカバンを長い道中気にかけながら持ち歩いたそうである。「こちらの方も本業だから絵の方も見てくれ。」という。アトリエには150号の変型の細長いキャンバスが立てかけてあり，ヴイナスの誕生をテーマにした構図で，赤と緑の補色をつかい，フォルムも力強く奔放な生命感に溢れた作品であったが「新しい試みにぶつかってみるが，描いているうちに，いつのまにか昔の技法がでてしまう。」と憤嘆する。

彼の作った茶器で飲んだお茶は，ことのほか美味であった。帰りしなにくれた湯呑は，小生のアトリエの一隅で素朴な光をはなっている。

●アトリエ訪問

谷内　　丞 会員

訪問／後藤庸也



●アトリエ訪問

諏訪田　勝　衛　会員

訪問／手島圭三郎

アトリエの左右の大きな窓から，5月の晴れ上った空を見上げて，「私の好きなモチーフは，どこまでも青くひろがる空と水です。」といわれる。そのことばには作者の現在の心境と人柄が，そのまま表現されているようでさわやかなひびきを持って伝わってくる。

木膚の美しさをそのまま生かしたつくりの壁面には様々の作品が掲げられ，中でも第1回全道展協会賞「みねのぶ風景」，第2回展協会賞「北大構内」がいぶし銀のように輝き，全道展30年のあゆみを，そのままあゆみ続けた歴史が伝わってくる。画家としてだけでなく，教育者，政治家の激務と両立させ現在に至った。きびしい道程を，今一度ゆっくりふり返えられているようでした。お話しがその点にふれると「政治に参与していても絵描の楽しさがたくさんありましたよ。」といわれる。情勢視察のハードスケジュールも，風景を見る楽しさが苦労を忘れさせ「他人のいやがる仕事まで引き受けました。」のことばに，誠実さで知られた政治家の顔がのぞく。ソ連やヨーロッパに行けたのも画家としてプラスになったといわれ，制作の時間をどうして生み出しました。との心配には「朝は4時に起きて制作をはじめます。」ときっぱりといわれる。温和な表情の中にも，するどいまなざしが秘められているのは，静かな中にも激しい情熱を持ち，一日を最大限に有効に生かす，芸術家の厳しさから生まれたもので，70歳近い年令にはどうしても見えない若々しさである。

8年間の道議の仕事を終えた現在，制作三昧の生活「さまたげられるものはなにもなくなりました。あとは自由に描くだけです。昨日は5点完成させました。」と机の上にたくさん並べられた，海辺の小品を指される。今後手を加えて完成させようとする作品が，倉庫の中に500点ばかりあり，それを全部仕上げるのが今年の予定とは，まさに驚きである。9月には札幌で個展である。イーゼルの上の50号は，えりも岬の荒い波と岩壁が，特徴あるダイナミックなタッチで迫ってくる。部屋の一隅には100号数枚が重ねてたてかけられ，まことに精力的な仕事ぶりである。中でも目を引いたのは，100号と同寸法の紙に描かれた習作で，一度納得のいくまで紙の上に描いてからキャンバスにむかう慎重さで，あの流れるような大胆なタッチを生む秘密であろう。

熱ぼく話される芸術論も，あくまで誠実で謙虚なひびきを持つ「ひとによく見られたいという気持から，なかなか抜けられませんでした。」「技法が不十分なので旧作の艶が失なわれました。今後は満足のいくまで追求します。」画業50年を越す人のことばとは，とうてい思われない。先年のヨーロッパ旅行で，スエーデンやオランダの古い建造物に魅せられ今年は写生中心の旅行を実現させる，と目を輝かされる。今年になって最愛の奥様を病気で失なわれた淋しさも，みじんも感じさせない，たくましい老を知らぬ芸術家の姿勢に，絵をかき続けて来たひとの強さ，絵をかける人間のしあわせをしみじみ感じさせるひとときでした。

●アトリエ訪問

小川マリ 会員

訪問／八木伸子

紫のすみれが乱れ咲くお庭，本当に久しぶり，ベルを押すと，黒セーター，ジーパンのマリ先生が飛び出していらした。今日は三雲先生はご外出とか。残念。

ごあいさつが済むと，私には馴れたこのアトリエだが，今日は今更キョロキョロ見渡す，右手は白い戸棚のあるダイニングキチン，中央は高く広い窓，モチーフの枯れ花が，マリ先生のお作品そのままに並んでいる。

広いアトリエだが，年々何かふえて，今は，大きなガスストーブ，ステレオ，本棚，それに一つだけすばらしいルイ王朝風の椅子，他はまあふつうの椅子テーブル，重ねられたカンバス，キスリングのポスターなどにかこまれてマリ先生のイーゼルがある。左手のブロックの壁はアーチ型にあいているのだが重いカーテンの奥は三雲先生のお仕事場で，私は一度とかいま見た事ない。要するにご主人は奥深く，マリ先生は，お台所でおいもの煮えるのを横目で見ながら，絵が描ける仕掛けになっている。

× × ×

ところでマリ先生の絵はいつ伺っても，裏かえしになっている。私は自分が，未完成の絵を見られるのは大キライだから，「見せて下さい」とお願いしたことは一度もなかった。今日は珍らしく「小さい絵でも見せますか」とおっしゃったのでホッとした。サムホールの朝顔，8号のコスモスなど——。やさしくつつましい絵，が，五六点並ぶとキッパリときびしい作家の姿が浮ぶ。来月銀座の画廊で女流五人程の（最ベテランの方達）展覧会がある由，私の感想だが，日本の女流の大家達は，おほむね後家のガンバリ的であって，強引な絵づくりの人が多い。だからその中で，ひっそりとご自分の仕事を追究されているマリ先生は，まことに貴重だ。「対象にふみこんでデッサンしなさい。」というご忠告も，さっぱりきかず，赤や黄の原色に気をとられ，先生にとっては，もてあましの放蕩弟子？である私，マリ先生の絵を見る度，「あ，本当の絵とは」と我にかえるのだ。

絵を見せて頂いている間においしいミルクテイが入っていた。ご新婚の札幌時代からも，伺う度に，お手料理をご馳走になった。「女はねえ」とマリ先生もお笑いになるけれど，絵と台所の両立は人にいえぬ努力がいる。私はよく，そのことでグチをいい泣いたりして先生を困らせた。考えて見ればマリ先生は，度々の三雲先生のご病気中も，絵を休むことはなかった。ぜったいにグチなどこぼさずに——。

× × ×

今日は先生の一生を変えたと思われる，すばらしい三雲先生との出会いや，明治にあの旧五番館を建てられたお父上のことなどおききしたかったが，全道展の記者としては失格であった。それに私の春陽作品にもふれることがなかった。マリ先生のこの無言はコワイ。この無言の叱咤を胸に，お庭のすみれを一株頂いておいとました。　5月13日